

ドキュメント 進路指導

5

生きる力を養ったための指導法を模索する教師の足跡

D V O E

W C U M

E N T

久留米高校

福岡県立
課題研究

大垣北高校

岐阜県立
小論文指導

平成7年当時、久留米高校の教師は二つの問題についての対応を検討していた。進路指導主事の高松大輔先生はこう振り返る。

「一つは、学習や学校行事に対して積極的な姿勢を持つ生徒が少ないという点です。本校には、中学校時代にリーダー的な経験をしたことのある生徒があまり入学してこない現状があり、『主体的な姿勢を育む』体制の確立が必要でした。もう一つは、進路指導の中心に課外授業などによる学習量の確保を据えたため、いつの間にか量に依存し、量に満足する体質ができてきたことです。その結果、生徒も教師も息切れて進学実績そのものも停滞していました。こうした状況を踏まえ、『21世紀委員会』が若手教師を主なメンバーとして組織された。委員会では久留米高校の今後のあり方について議論を重ね、『目先の結果にとらわれない、生徒の主体性を育む指導体制の確立』、生徒に自分の在り

方生き方を考えさせるための活動」などを提言するにいたった。

変化が訪れた

のは、折しもその年、度が変わるにつれ、ときだった。例年35名前後であった国公立大の現役の合格者数が、その年は85名に急増したのだ。7年度の3年生の担任団と進路指導部は、詰め込み型の指導に疑問を抱き、『自らの課題を認識し、それを克服する力を育む』ところが進路指導の根幹だ」と考えていたという。

「課題解決能力は、人間が社会で生

自 転車から見た久留米の道路事情を再検証しようと、交通量調査に取り組む生徒たち。グループ研究の場は学外にも広がる。



久留米高校

福岡県立



福岡県立久留米高校進路指導主事
高松大輔 Takamatsu Daisuke
昭和36年福岡県生まれ。英語指導。福岡高校を経て、平成6年より同校に勤務。今年度、3年生の副担任も務める。

興味・関心を軸に 課題発見・解決の 能力を養う



福岡県立久留米高校教務部
日高晋介 Hidaka Shinzuke
昭和38年宮崎県生まれ。「21世紀委員会」のメンバーの1人。今年度、2年生の担任。



福岡県立久留米高校研修部主任
石井倫子 Ishii Michiko
平成6年より同校に勤務。国語担当。前任校は小郡高校。今年度、1年生の副担任。

きていくのに必要な基本的な力であり、そのような力を養ったうえで質の高い授業を行えば、受験の結果はあとからついてくると私たちは考えました。そして、その『生きる力』を育てる場は、日常のクラス活動や授業、部活動、体育祭などの学校活動なのです。生徒を指導する教師の側が、結果ではなくプロセスを大切にしていけば、生き方指導と受験指導は矛盾しません。(高松先生)

この姿勢は学年集会にはつきり表れている。高松先生が進路指導部として生徒に話すとき、受験や進路のことは前面に出さないという。

「体育祭の直前期だったら、生徒に話すのは『体育祭に全力を尽くせ』です。進路指導部というより生徒指導部のような話ばかりしてしまったりします。分掌ごとの役割に境がないのです。学年主任を中心に学年の担当教師全員が、『生きる力』を育むという共通の観点に基づき、その時々の問題点を認識し合いながら集会などに臨んでいるからできることなのでしょうね」

以後、同校では課外授業の時間を毎年削減しながらも国公立大の現役合格者は90名以上を維持している。

新しい

教育の形作りは、平成8年度から研修部の主任である石井倫子先生に委ねられ、わずかな期間で急速に具体化していった。福岡県ではレインボープロジェクトといって、高校を活性化させるための活動費を支給する支援制度を設けている。予算面はこの制

5月	実施要領の配付、説明 テーマ決め(アンケート調査) 計画・立案	11月	第1回レポート提出(11月5日)
6月	計画書の提出(6月15日) 調査研究の開始	12月	第2回レポート提出(12月3日) 最終レポート提出(12月7日) 分野別優秀作品の選考
7月	研究実践	1月	優秀6作品の選考
8月	<セサミの日> ・考査最終日 ・終業式の日 ・7月27日から29日午後 ・夏休みの課外授業の火曜4限目	2月	分野別代表者発表会 全体発表会(2月9日) 優秀6作品から上位3作品選考 審査員は生徒、職員、保護者
9月	レポート作成		表彰
10月		3月	作品集の作成・配付

10年度の取り組みでは研究期間を長く設定し、じっくり取り組めるようにした。また、レポート作成に重点を置き、小論文の課題は出さないこととした。

度を最大限に活用することになった。プロジェクト名は「オーブン・セサミ」(開け、こま)から取ってセサミプランと名づけられ、生徒が自分たちでテーマを決めて調査を行い、レポートや小論文にまとめる活動と位置づけられた。そして平成8年6月、久留米高校のセサミプランがスタートした。対象となるのは1、2年生全員。クラスごとに久留米の歴史、環境、産業文化に関するテーマを設定。担任の指導に基づきながら、そのテーマについてグループで文献調査や現地調査を行うというものだ。数回のLHRの時間と夏休みの課外授業の4時間目が、調査研究に取り組むセサミタイムとして1回につき50分ほど設けられた。9月にはレポ

トにまとめ、発表会も実施。そして3学期にはレポートしたテーマを基に、個々の生徒に「21世紀の久留米」についての小論文の課題が課せられた。また、地域にゆかりのある人を招いての講演会も開かれた。

だがセサミプランは、現実には決して当初のねらいどおりには進まなかった。

「各クラスから挙がったテーマを見てみると、『久留米の国際化』とか『久留米の祭り』など、バラエティーに富んだ興味深いものになっています。ところが実際に生徒たちが書き上げたレポートを読むと、どうもレベルが低い。深さも広がりもないのです」(石井先生)

当時、クラス担任を務めていた日高晋介先生も、生徒をどのように指導すべきか、いきなり壁にぶちあたった。

「テーマは決めたものの、生徒たちは実際それをどう扱えばいいのかわからないのです。黙っていれば先生が指示してくれるだろうと思いついてはいる。また、研究は1班6、7人のグループに分かれて行うことになるのですが、実際に活動しているのは一部の生徒だけ。残りの生徒は自分の班がなにをやっているのかさえない様子でした」

といった基本的なところがしつかりしているのです。これなしには、どんなアイデアも工夫も生かすことはできません」(石井先生)

今年設定されたテーマは、全部で90種類近く、「外国人に日本語を教えよう」というユニークなものから、「クローン技術」といった科学的分野、「少年犯罪と警察」、「子どもがいる共働き家庭における問題点」といった社会性の高いものまで、分野は多岐に渡っている。

石井先生はまた、セサミプランの運営を、教師主導から生徒主導のものへと少しずつ移行させたいという思いも強く持っている。

「これまでは、教師の組織である『セサミ委員会』がプランニングを行い、担任が生徒へ連絡、指導するとい

生徒はセサミプランの活動用の名刺を持って調査に向かう。研究はあくまで生徒が主体となって進められる。

廊下で教師に質問する。生徒たちは学習にも積極的になったが、この環境を作り出したのは、教師の強制による詰め込み型の指導では決まらなかった。



またセサミプランは、指導にあたる担任すべてに評判がよいわけではなかった。ただでさえ多くの業務を抱えているうえに、新たにセサミプランの指導にあたることを負担と感じる担任がいても、それは無理のないことだった。

翌年、

3年生の担任となった石井先生は、いったんセサミプランから離れることになった。9年度もセサミプランは引き続き実施され、10年度再びセサミプランの担当責任者になった石井先生は、抜本的な改革に乗り出した。

まず、クラスでテーマを考えて担任が指導するスタイルを中止。3年生のクラス担任を除く教師全員が、アドバイザーとして指導にあたることにした。各教師は自分の興味・関心、得意分野などからテーマを選んで生徒に提示。生徒の側は、教師が挙げたテーマを選択してもいいし、自分からテーマを設定してもいいことにした。そのため活動はクラスの枠組みを越えて、研究グループに分かれて行われることになった。またこれまでのテーマは「久留米」に限

う形で行っていました。それを今年は、生徒会の機関である『文化委員会』を企画運営の中心に据え、生徒への連絡のほとんどを任せています。講演会や発表会の運営も生徒中心で行うことにしています」

また昨年までは、生徒が企業や施設に調査に行くときには、教師があらかじめ電話で交渉したり、公文書を出したりしていたが、今年からは、どうしても公文書が必要な企業や施設以外は、基本的には生徒自身にアポイントを取らせている。

「こちらから出かけていくだけでなく、地域の方を講師として学校に招き講演会や講習会を行ったグループもいくつかありますが、それも自分たちで交渉しています。学校の住所と電話番号を書き込んだ生徒用の名刺も準備したんです。まずは生徒を信頼して行動させ、もしトラブルが起きたときにはあとからフォローすることになりましたが、結果は『案ずるより産むがやすし』のようです」(石井先生)

学校を開き地域の教育力を借りることも、プランの眼目の一つ。職員室前の公衆電話では、話す内容をメモしたノートを見ながら、企業や各機関に電話をかける生徒を見かける。生徒が社会性を身につける絶好のチャンスといえる。

セサミプランは、

まだまだ多くの課題を抱えたままでもある。教師の指示を待っているような受け身の生徒は依然として少なくないし、生徒にテーマ設定をさせると、興味本位の安易な

られていたが、生徒がより興味を持って研究に取り組むことができるように、その対象は日常生活全般にまで広げられることになった。

「教師全員で指導にあたる体制にしたことによって、仕事量の不公平感からくる教師の負担感はずいぶん軽減されたと思います。また教師が自分の得意分野に即したテーマを指導できるようになったので、その点も好評ですね。生徒の側も、クラス単位ではなく個人単位でテーマを選べるようになったため、取り組みの姿勢がずいぶん積極的になりました」(石井先生)

活動がスムーズに進むようになったのは、各学年の若手教師を中心に組織した「セサミ委員会」の機動力に負つて大きいのという。

「また、本校は事務室が協力的で、担任団の団結力そして校長を中心とする管理職の後押しももめだつという。

「私たちは課題研究を通じて、生徒たちに自己探求や社会に対する視点を深めてほしいという願いがあるのですが、それがなかなか生徒に伝わらない。テーマ設定、調査研究、レポート作成の各段階に応じて適切な助言をしていくというのは難しいですね」(日高先生)

高松先生も指導は行き詰まりの連続だという。「課題を自分で見つけ、調査先に自分でアポイントを取り、的確な質問をするためには、生徒自身も指導者も大変な下準備が必要です。しかし、その現実を目にしたとき、だからこそこういう活動が必要なんだということを感じますね」

セサミプランのような取り組みは、通常の教科指導などと違い、指導の結果がダイレクトに形になって表れにくい、助走期間の長い教育活動といえる。それだけに教師は、「こんなことをしていいのだろうか」という不安を抱きやすい。だが、久留米高校の教師はなにより見守る姿勢、待つ姿勢が必要なのだと確信している。「目先の結果を追い求め、量と効率に頼る今までの教育のあり方に行き詰まりを感じ、本来あるべき教育のあり方に立ち戻ろう」として始めたのが本校のセサミプランです。主体性のない『学び』から得られるものなどが知れています。久留米高校のセサミプランはまだまだ助走期間です。私たち教師には今、生徒の可能性を信じて援助に徹する忍耐力が求められていると思つています」(石井先生)



今年5月7日、

大垣北高校では、今年度最初の小論文に関するHR活動が全学年全クラスで開かれた。1、2年生のクラスでは担任から、小論文指導の意義と目的、これから具体的にどのような指導を行っていくかといったことが説明された。また3年生のクラスは、より入試対策に絞った話となった。そして生徒たちには、これから1年間使うことになる800字詰め50枚の原稿用紙帳「小論文ノート」と、小論文の学習法などについて記した『小論文の手引き』が手渡された。

大垣北高校が、3年生ばかりでなく、1、2年生を対象とした小論文指導を行うようになったのは、平成9年度からのことである。そのねらいについては、生徒に配付された資料にてわかりやすく書かれているので一部を引用してみる。

近年、大学受験において、小論文試験を課すところが増えてきました。これは「学力だけでなく、受験生の人間性を評価したい」という大学側の意識の変化が大きいと思います。また、出題範囲は広く、内容的に深いことを答えさせ

かを認識し、個性を伸ばしていく手段にしてください。

つまり同校の低学年を対象とした小論文指導には、小論文入試に早い段階から対応するという目的とともに、生徒の人間性を深めるというねらいもあるわけだ。

生徒に配った『小論文の手引き』には、学習法だけでなく、小論文指導に寄せる教師の思いもつづられている。



大垣北高校

低学年次からの自己表現の作業で自らの殻を破る



岐阜県立大垣北高校進路指導主事
井尾春雄 Haruo Inoue
昭和16年、岐阜県生まれ。
同校に赴任して12年目。
進路指導主事になってからは4年目となる。担当教科は数学。

る出題が多いのです。3年生になってから慌て取り組んでいるのでは、とても間に合いません。

それに受験対策としての小論文ばかりが大事なのではなく、「将来に渡る人間としてのあり



岐阜県立大垣北高校進路指導部
奥村哲也 Tetsuya Okumura
昭和36年、岐阜県生まれ。
担当教科は国語。1、2年生向けの小論文指導の体制作りにあたって中心的役割を果たした。



岐阜県立大垣北高校進路指導部
時田恵子 Keiko Tokida
昭和29年、兵庫県生まれ。
担当教科は国語。前任校は羽島北高校。同校に赴任して7年目。
進路指導部所属は今年度から。

方「生き方」について考える力を育てるために積極的に取り組んでください。「読み」「書き」「考える」という小論文指導を通して人間、自然、環境、言語、科学などの分野について、1人の青年としていかに考え、かかわっていくの

す

1、2年生を

対象とした大垣北高校の小論文指導にお

いて、その骨格作りを担ったのは進路指導部である。そして、進路指導部で練られた企画案は学年会へと降ろされて検討された。進路指導主事の井尾春雄先生によると、先生方はみな小論文指導に理解を示してくれたという。

「実施にあたってはどの先生も、『そろそろやらなくては』という思いがあったみたいです。単なる受験対策だけではなく、将来どのようになり生きていきたいかについて考えさせることも、高校現場の課題になっていきますからね」

進路指導部と学年会の方針に添って、実際に生徒たちを指導するのは、担任の教師である。指導には、HR活動の時間が使われた。生徒たちは、5月、7月、冬休み、1月、春休みの計5回、担任に課題小論文を提出することになる。このほかにも夏休みに「課題図書読書感想文」、10月には「同和教育映画感想文」が課せられ、小論文以外にも生徒が文章を書く機会が作られている。

小論文のテーマは、1年生の間は文理のバランスをとって出題され、2年生の後半からは、文系と理系とでは、それぞれ別のテーマが出される。また、小論文の形態は、テーマを与えられてそれについて書く「テーマ出題型」、文章を読んでそれについて論述していく「課題文型」、さらにグラフを読み取りながら分析する「データ読み取り型」などバラエティーに富むように

「生徒たちを見ると、自分の殻を破れていない子が多いんですよ。殻が破れていないというのは、自己が殻の中であって、それをどう出しているのかわからない状態のことです。これまで彼らが受けてきた教育は『みんなにそろえなさい』というのが中心で、『自分の意見をいなさい』というのは、ほとんど経験していないと思っんです。小論文指導とは、彼らに自己表現をする場を提供することでもあるわけ

工夫されている。小論文に割く時間についても、テーマによってHRで制限時間を設けて書かせる場合と、家に帰ってじっくり書かせる場合など使い分けている。進路指導部の時田田恵子先生は、テーマを設定することも簡単ではないという。

「1年生に最初に与えたテーマは『北高生と自分。身近なテーマだし書きやすいと思ったのですが、意外にも生徒たちの評価は悪いんですね。北高生像と自分を対比して書けばいいのかわからない』という。難しいですよ」

生徒が提出した小論文の評価方法についてはだが、同校では基本的に1、2年生については添削は行っていない。小論文の完成度を上げるために、生徒に書き直しを要求するようないいことではないという。生徒の小論文を読んだ担任の教師は、原稿用紙の「評」の欄に、数百字程度のコメントを書き込んで、生徒に返却することになる。

「低学年次からの小論文指導の一番のねらいは、生徒に自分の殻を破らせることにあるんです。だから教師が添削をすることによって、生徒を型にはめたくない。1、2年生の間は書く



のような小論文を書いているかを知りきつかけとなる。また、昨年2年生の各クラスでは、年度末に「来年1年間をどのように過ごしたいか」という「決意の文」を書かせた。そして1人ひとりの文章をSRのときに読んで聞かせたところ、生徒たちは刺激を受け、やる気の元になったようだ。

「自分のクラスの生徒が書いた文章

小 論文指導は単なる受験指導にとどまらず、生徒の書いた文章を通して、教師が生徒を理解する機会にもつながる。

楽しさを味わってもらえればと思っています。添削は3年生になってからでも十分です」(奥村先生)

初めて

小論文指導を受けた昨年度の1、2年生は今年、2年生、3年生にそれぞれ進級した。生徒たちの様子に、成長は見られたのだろうか。

「小論文が苦痛でしかたがなかったような生徒が、それほど苦勞することなく書けるようになったのは確かかなようです。ある生徒は『小論文はほかの教科と違って自由に論じることができるので、なんだかほろほろです』といっていました。もっとも、殻を破るというところまでは、まだまだ達していないかもしれませんが」(奥村先生)

時田先生は、生徒が文章を書くときの姿勢が変わってきたという。

「小論文は日記とは違うわけだから、読み手を意識して、自分の意見や思いを論理立てて言葉にすることが必要ですよ。その点、相手にわかる文章が書けるようになってきました。人に伝えたいという気持ちが出てきたということでしょう」

教師の側も、課題小論文を活用してクラス運



どんなテーマで書かせるかも重要な問題。生徒が自分に引き寄せて考え、そこからさらにいろいろ調べられるようなテーマが求められる。

営に役立てる例が出てきた。うまく書けている小論文を氏名を伏せたうえで生徒に配っている教師がいる。生徒にとっては、いっしょに学んでいるクラスメートがどんな考え方をもち、ど

を読むことは、担任の先生にとっても勉強になるはずですよ。『へえ、彼はこんなことを考えているのか』とか『こんなことに興味を持っているんだな』など、生徒の文章から発見することは多いですからね。これは副次的な効果ですが、小論文は進路相談などにも役立てることができると思います」(井尾先生)

年5回の

課題小論文は、担任の教師に実だ。いくら添削の必要はなく、数百字程度の簡単な講評で済むとしても、1人ひとりの生徒の文章を丹念に読んでいくのはそれなりに時間がかかる。回数を重ねることによって生徒の力は着実に伸びるが、反面担任の負担が増えるというジレンマもある。

「一つの対応策として考えたのが、副担任にも協力してもらうことです。本校は1学年に10クラスあるのですが、各学年ごとに5人の副担任がいます。この副担任の先生方に、5回の課題提出のうち1回は担当してもらおうと思っています」(井尾先生)

また、担任の教師は決して小論文の専門家ではない。自分のコメントが本当に適切なものか、各学年ごとにどの程度のレベルのコメントを書けばいいのか迷うことも少なくない。同校では各学年ごとに小論文指導のねらいと具体的な進め方を提示した学習年次計画や、コメントを書くうえでチェックポイントをまとめたものが多いという。

小論文(内容面)の評価のポイント 抜粋

書き出し	最初の一文は書き出しとして効果的か 主張につまづくつながるものか
論点	明確であるか 問題文に沿ったものであるか 資料(課題文・図表)中の大切な点を指摘しているか
主張	立場は明確であるか 同じことの繰り返しになっていないか
具体例	主張を助ける例が出されているか 自己の体験や読書を役立てているか
反論	反論を予想しているか 自分の意見に対する別の見方はないかと模索しているか
まとめ	無駄な繰り返しをしていないか すっきりとまとめているか

「そこで本校では今年から、1、2年生の正副担任を対象にした、小論文の研修会を開くことにしました。研修会では、実際に生徒たちが書いた小論文を材料にして、効果的なコメントのしかたについて説明していくつもりです。コメントのポイントは、最初により部分をほめて、次に課題点を書くということなんです。しかもその課題点は、生徒自身が気がついていないと思われる箇所を指摘してあげた方がいいですね。そしてただ欠点を指摘するだけではなく、『だからどうすればいいか』をつけ加えてあげることが大事です。今度の研修会では、そんなことを先生方に話そうと思っています」(奥村先生)

教師の評価の足並みをそろえることにより、大垣北高校の小論文指導はより充実したものと前進しているようだ。